

第9回 性差医学セミナー 報告書

歯科医療における性差医学

松木 貴彦 先生

九州歯科大学顎口腔欠損再構築学分野

2010年7月1日 17:00-19:00

松木先生は、米国Dupont社留学後、神奈川歯科大学大学院卒業をなさり、同大学で歯科放射線学講座を学び、九州歯科大学の顎口腔欠損再構築分野に勤務なさっています。歯科領域における性差医学についてお話を伺いました。

.....

歯学領域において女性の診療で考慮すべき事項として米国歯科医師会「Women's Oral Health Issues」から次のようなものが挙げられている。口腔乾燥症、顎関節障害、膠原病や免疫性疾患に伴う症状、妊娠・出産期および更年期の歯周炎、甲状腺疾患など全身疾患、摂食障害など精神疾患、骨粗鬆症など骨病変との関連などである。また、歯科疾患実態調査（平成17年）では、50代前半では女性の方が20本以上の歯をもっている率が高いのに、50代後半になると女性の方が低くなり、80代では男性の半分しか20本維持していない、ということがわかっている。女性の方が歯磨きは熱心だと言われているにも関わらず、歯の維持が難しい理由に性差因子が関わっている可能性がある。

歯の成長と性差に関しては、乳幼児期にはほとんど差がなく、学童期にやや女性の方が齲蝕が多い程度である。思春期になると女性の方に歯周炎が多いと報告されている。成人期には、女性の方が歯の衛生に配慮しており、齲蝕の治療も積極的であるにも関わらず、50歳以降に残存歯数が減少する理由としては、ドライマウスや骨粗鬆症が関係している可能性がある。妊娠期には、妊娠性歯肉炎、妊娠聖エプーリス、齲蝕の多発、唾液分泌減少などが起こりやすい。つわりにより味覚の変化も起こる。妊婦に重度な歯周疾患がおおると、早産・低体重児出産のリスクが7.5倍になるという報告もある。妊娠期の歯科治療は、妊娠中期が望ましい。

唾液線には女性ホルモン受容体があり、女性ホルモンの減少が唾液分泌の低下をきたす可能性がある。また、加齢に伴う社会的な変化ストレスにより自律神経の緊張が起こり、唾液分泌の低下をきたす可能性もある。ドライマウスは齲蝕や歯周疾患を増加させるため、唾液分泌促進剤、漢方薬、唾液選マッサージなど適切な治療を受ける必要がある。

顎関節の痛みや咬合異常感は女性に多い。解剖学的に骨、筋肉が脆弱であること、顎が小さいこと、疼痛感受性が強いこと、症状を訴えやすいこと、などが原因として考えられている。精神的な疾患、たとえばうつ病や不安神経症を伴う場合もあり、場合によっては精神科および心療内科的なアプローチが必要な場合もある。

歯科領域の性差医学は、まだ発展段階にある。今後、研究、診療領域でのデータ集積が望まれる。

